

# 「天才でごめんなさい」は詫びているのか

## —ことばの現代アート—

彭 国 躍

2年ほど前に森美術館で現代アートの展覧会が催された。その作品内容について賛否両論が巻き起こり、ある市民団体から抗議され撤去を求められることもあった。私は、作品内容以上に、展覧会のポスターで画家本人の土下座写真とタイトル「会田誠展：天才でごめんなさい」に興味をそそられ、思わず「すごい」と呟いた。含意形成のメカニズムを研究する者として、その発話の本質について論証する衝動に駆られた。

まず、謝罪発話行為の本質とは何なのか。会田誠はこれで詫びているのだろうか。

語用論における発話行為理論に基づけば、謝罪発話行為の遂行には、少なくとも次のような前提条件（「適切性条件」の一部）が満たされる必要がある。

事前条件：話者が相手に不利益を与えた。

誠実条件：話者が当該行為に対して責任を認め、後悔し、償いや再発防止を約束する。

会田誠は発話の受け手（鑑賞者または社会）に「天才である」という事実により不利益をもたらしたのだろうか。そして、彼はそれに責任を認め、悔いの念を抱き、弁償や改正の約束までしているのだろうか。いや、しているとは思わないと答えると、では、「ごめんなさい」を使ったこの発話は一体何だったのだろうか、ということになる。

私は、かつて謝罪発話行為について大きく、適切性条件が満たされる場合の「真性型謝罪」と、謝罪のことばを使いながら適切性条件が満たされない場合の「擬似型謝罪」に分けた。そして、後者をさらに、利他性に動機づけられる「親善型謝

罪」と、利己性に動機づけられる「偽善型謝罪」に細分した。「親善型謝罪」とは、「テーブルが狭くてすみませんね」、「ごめんなさいね。景色が悪くて」などのように、加害責任がないにもかかわらず、相手を感じる不便、不快や失望に対して責任を感じ詫びるケース、「偽善型謝罪」とは、加害事実や責任を問われるのに、それを認めようとせず、本件に対する責任追求をかわそうと、弁償や改正の義務が生じない別件（世間を騒がせたことなど）を立てて詫びるケースが想定される。「偽善型謝罪」は、「別件謝罪」とも呼び、保身の武器として「謝罪のことばもない」という非難を封じ込めるのに効果的である。<sup>※1</sup>

かりに会田誠の謝罪は真性型ではなく、擬似型だとする。すると、それは親善型と偽善型のどちらにもすんなり嵌らないという問題が生じる。責任を負うべき加害事実がないという点では親善型に似ているが、非を認めず悔い改めないまま謝罪のことばを使うという点では偽善型にも似ている。発話行為理論は日常言語の分析のために考案されたもので、非日常的、非現実的なケースは想定外である。「天才でごめんなさい」にはまさにその非日常性により通常の謝罪表現より複雑な含意構造が作り出されている。その複雑さはこの発話に内包される2つの相反する価値含意の衝突に起因すると私は考える。

「天才」とは「生まれつき備わったすぐれた才能。また、そういう才能をもっている人」（『広辞苑』）を指す。このことばが持つ「すぐれた才能」というプラスの価値含意のため、人への賛辞として使うことはあっても、自分自身に対して使うことに

大抵の人は抵抗を感じる。その抵抗は、たとえ自分が天才だと思っていなくても、人間社会の言語行動における普遍的な原理の1つ「謙遜の原則」(Modesty Maxim)<sup>注2</sup>の存在を感じ取っているからである。

もしある人が現実の社会で自分が天才だと思っていることを本気で主張したとしたら、どうなるのだろうか。まず、「謙遜の原則」の違反により、その発話から字義的意味の外にその人が世の中を見下ろすという「傲慢」含意が生まれる。そして「尊大な奴」としてまわりの人や世間からバッシングを受けることになろう。もしバッシングから逃れようとするればどうするのか。少なくとも2つの方法がある。もっとも手っ取り早い方法は自分が天才だと思ふこと、またはその主張をおもてに出すことをやめる。もし主義主張も曲げたくなければ、バッシングも受けたくない場合はどうするのか。もう1つの方法がある。つまり、主張を変えないままひたすら謝る。たとえば反省していなくても責任を認めなくてもとにかく頭を下げて詫げる。そうすることにより、天才を自認する行為に含意される傲慢さと、詫げる行為に付随する低姿勢が1つの発話に共存するという非現実的、非日常的な発話行為が生まれる。

このように作り出されたことばは、ある意味において、正面と側面の合成、前景と背景の交錯な



ピカソ「ドラ・マルの肖像」1937年



ルネ・マグリット「白紙委任状」1965年

ど2つの相反する視点を1枚の絵画に押し込むピカソのキュビズムやマグリットのシュールレアリズムなどのモダンアートが持つ非現実的、非日常的な表現手法に相通じるものである。

もし、会田誠は、疑似型謝罪ではなく、誠心誠意に真性型謝罪を遂行しようとしていると解釈したら、どうなるのだろうか。誠実条件により、彼は天才であることを悔い改め、二度と天才的な発想や言動をしないことを約束したことになるを得ない。そう解釈することにより、含意された別のメッセージが現れてくる。すなわち、社会の空気が読めない天才たちが土下座させられ均され潰される現実に対して一種の警鐘を鳴らすという含意が創出されることになる。

「天才でごめんなさい」には、このように会田誠の前衛芸術の本質が隠されていると私は解釈する。

注1： 彭国躍2005「現代日本語の謝罪発話行為の類型と機能」(『日本語学』Vol.24 明治書院)

注2： Leech, Geoffrey N. 1983 Principles of pragmatics Longman Group Limited, London 池上嘉彦, 河上誓作訳『語用論』1987 紀伊國屋書店